

生徒会長

沢城朱莉の

天戸祐輝

挿絵/野村輝弥

立ち読み版



第一章

俺は彼女に近づけないっ

006

第二章

普段の彼女はすごく大胆っ！

031

第三章

授業をサボって二人つきりっ

079

第四章

生徒会にようこそ？

123

第五章

彼女の部屋で二回目の……？

164

第六章

沢城朱莉のヒミツっ！

205

登場人物紹介

Characters



いさわこうた 衣沢耕太

感情が表に現れず、強面のためまわりから敬遠されている男子学生。

顔に似合わず、優しい一面も持つ。現在、朱莉に片思い中。

さわしろあかり 沢城朱莉

耕太のクラスメイトで、生徒会長。学内では男子を中心に高い人気を誇るが、男子と話すのはかなり苦手。学園の外では耕太をデートに誘ったりなど、活発に行動するが……!?



「えっ……」

もしかして揉み方を間違え、痛みを与えてしまったのかもしれない。そんなことを考えるだけで、罪悪感が込み上げてくる。

「そ、そんな残念そうな顔しないでよ……。き、気持ちはよかつたんだけど、わたしだけなんて悪いような気がして。それに……」

耕太に責任はないとばかりに咬いた彼女が、何かを隠すように押し黙った。期待しすぎたペニスはずボンの中で引き攣ってしまい、沢城の誘惑に我慢し続けた興奮が、今にも爆発してしまいそうになっている。

「も、もう、しょうがないなあ……。でも、エッチはまだ早いから……。その、してほし
いことがあったら、してあげる……」

そう咬いた彼女が、恥ずかしげに顔を背けた。

「してほしいことって……」

色々な考えが頭の中を駆け巡るが、それを言葉にしたら嫌われそうで何も言えない。ただ黙って、彼女の美双乳を見つめてしまうだけだ。

「む、胸を……。クス、いいよ、こういうこととしてあげる」

視線だけで何かを感じ取ったのだろう。

生徒会長は胸を覆い隠していた腕を退かし、緊張しながらも耕太のズボンに触れて、ト

ランクスの中に柔らかい手を忍び込ませてきた。

「うっ」

触れてきた手に、思わず呻いてしまう。

自分でさわる時は何ともない刺激。なのだが、彼女の手が触れただけで、焦燥的なくすぐったさが股間を直撃してくる。

「か、硬すぎ……きやつ」

「くおっ」

硬いペニスに驚きながら、柔らかい手が肉幹を引き出した途端。弾けるように生徒会長の前目に龟头が飛び出してしまい、短い悲鳴が部屋に響いた。

初めて他人にさわられたペニスはジンジンと疼いてしまい、触れられただけでもかかわらず、もう先液が溢れ出していく。

「こ、こんなになってるなんて……」

「ご、ごめん」

興奮しすぎたことを責められたと思い、ついあやまつてしまうと、

「あやまらなくてもいいのに、いきなりで驚いちゃっただけだし……。それに、わたしでこんなに興奮してくれてると思うと、なんか嬉しくて……」

恥ずかしそうにペニスを見つめた彼女が、そっと肉幹に触れていた手を離し、露わにな

ついていた肉果実を両手で持ち上げてきた。

柔らかそうに揺れながら掲げられた柔房の間には、魅惑的な谷間が現れ、耕太はそこから目が離せなくなってしまう。

ゴクッ……。

（本当に、してくれる気なのか……）

期待に生唾を飲み込みながらも、沢城が奉仕をしようとしていることが信じられない。

しかし、そんな耕太の気持ちなど気づかない彼女は、両手で掲げているお椀型の肉果実を、徐々に肉幹に近づけてくる。

ともにベッドの上に居るために胸奉仕しづらいポニテ美少女は、お尻を掲げながら四つん這いになり、ゆっくりと魅惑的な柔房をペニスに押し付け、

「は、初めてだから、上手にできないかもだけど……んっ」
ふにゅっ。

「くうあっ!!」

柔らかい乳肌が肉幹を包み込んできた感覚に、思わず顎を仰け反らせて呻いてしまった。さわられた刺激もたまらなかつたが、柔房で包まれた刺激はそれ以上だ。

興奮で脈動しているペニスには彼女の体温と、肉果実の官能的な弾力が感じられ、肉幹を柔房の中に突き刺しているような錯覚さえ感じる。

目を肢体に向けてみれば、お尻を掲げているためにミニスカートの裾が捲れ、桃尻を包むピントのハイグレレースショーツが丸見えの状態だった。

まだ本格的な奉仕をされているわけでもないのに、耕太は興奮を最高潮にまで高めてしまい、肉幹を引き攀らせながら尿道を痺れさせてしまう。

「うっ、や、ヤバイ……これじゃすぐに……っ」

歯を食いしばって柔房の刺激に耐える。

憧れていた美少女に奉仕してもらえるのだ。

すこしでも長く持たせ、肉果実の気持ちよさを感じていたい。だが、限界まで勃起したペニスは勝手に胸の谷間で震え、根元が精液を駆け登らせようと甘ったるく痺れていく。

「こ、こうすればいいのかな……んっ、んっ」

「——っ!!」

辿々しい手つきで、生徒会長が肉果実を上下に動かし始めた。

胸を動かす度に、緑の瞳を上目遣いにして耕太の顔を眺める生徒会長は、肉幹を上から下に舐め、彼が感じるポイントを見つけようとしている。

「き、気持ちいいよ……もつと先を……うおっ!!」

呻くように呟いた言葉に、素直に従った舌が亀頭を舐めてきた途端。強烈な痺れが亀頭から走ってきた。

彼が気持ちよさそうに呻いた姿に、ポニテ美少女は同じように肉果実を動かして刺激し、舌先を集中的に亀頭に這わせてくる。

「こうして……こうすれば感じるみたいね……ンふあむ……ちゆる……」

「うっ」

すこしの変化も見逃さないように耕太の様子を見ていた彼女が、早くも胸奉仕のやりかたを憶えたらしい。

肉果実をさらに中央に寄せて肉幹だけを集中的に包んで扱き、乳肌を亀頭裏にまで触れさせてくすぐってきたのだ。

「だ、だんだん分かってきたかも……、えっと、これからこうすれば……はむっ」

「うああっ」

胸淫のやりかたをあつという間に憶えた彼女が、突然胸上から飛び出していた亀頭に小さな唇を被せ、震える舌を這わせてきた。

柔らかい肉果実に扱かれた肉幹は、血管まで浮き出して疼き出してしまい、亀頭が激しくすぐったさに包み込まれている。

初めて奉仕を受けた身体は、今にも腰を振って自分勝手な射精をしてしまいそうになり、理性が今にも吹っ飛んでしまいそうだ。

「んチュふあ……んん……ね、ねえ、気持ちいい？」



肉果実で肉幹を扱きながら、亀頭から口を離れた彼女が尋ねてきた。

しかし、何も答えられない。

沢城が与えてくれる刺激と、恥ずかしがりながらも責める楽しさを憶えた笑顔。そして、ショーツに包まれた桃尻が左右に揺れ動いている光景に興奮してしまい、何を話せばいいのか言葉が見つからないのだ。

美双乳に扱かれる肉幹はビクビクと脈動を早めて悦疼きを繰り返してしまい、他のことに意識を向けてなければ、今にも射精をしてしまいそうになっている。

歯を喰いしぼり、頭の中が血でいっぱいになるような興奮を堪えて（こら）いると、そんな彼の様子に気づいた生徒会長が、

「気持ちよさそうだね、それじゃ……もつと舌をこういう風に使ってみたら……はむっ、んっ、んっ、んっ」

「っ!!」

嬉しそうに笑みを浮かべ、さらに強く柔房で肉幹を扱きながら再び切っ先にしゃぶりつき、亀頭全体に舌を這わせて鈴口まで責めてきた。

耕太の腰が跳ねたことで、この奉仕で感じると分かった生徒会長は、ポニーテールの頭を何度も上下に動かしながら亀頭を舐めしゃぶり、舌先で先割れをくすぐってくる。

張りの強い柔房は肉幹にピッタリと張り付き、温かい彼女の肌が汗でヌメって焦燥的な

ムズ痒さを感じさせる。吐息の混じった呼吸は部屋中に響き、まるで五感すべてで生徒会長の奉仕を受けているような気分になってしまふ。

(このままじゃ出ちゃうよ、なんとかしないと……っ)

とは思うが、憧れていた女の子にこんな奉仕をしてもらっている状態では、別のことなど考えられない。

この状況で集中できることを探してみるが、エッチなこと以外は思いつかず、口淫する度に左右に揺れ動く桃尻に目が吸い付いてしまうだけだ。

「さ、沢城……」

「ふあふい……んっ、んん……チュパっ、ん……んふううっ!？」

射精しそうな刺激からなんとか気を逸らそうと腕を動かし、見ているピンクショーツに包まれた桃尻に手を触れさせた途端。股間で上下に動いていた栗色の頭が止まり、亀頭を啜えた唇から短い嬌声が聞こえてきた。

手にはレースの布越しにお尻の柔らかさが伝わり、指を軽く動かすだけで肢体がピクピクと反応してくる。

(お尻もこんなに柔らかいんだ……、でも今はっ)

胸と同じようなお尻の柔らかさに感動を覚えるえているヒマなどない。

何かに集中をしてなければ射精をしまいそうな耕太は、そのまま桃尻の割れ目に指

を這わせ、半ば強引に身体を引き寄せた。

「んうっ、んふぁ……これじゃ、してあげられなく……はふっ」

四つん這いの体勢から横に寝そべるような体勢になった沢城が、整えられた細眉をハの字にして、奉仕しづらいと腫で訴えてくる。

彼に対して真横状態になっているために美双乳は縦に並び、唇は自然とペニスを横啜えにしているような状態だ。

ペニスの刺激が弱くなったことで若干の余裕が生まれた彼は、そのまま目の前に来たシヨーツの股布に指先を近づけていく。

「沢城のここ、俺もしてあげるから」

「ここって……。えっ、そんな……ふぁんんっ!!」

耕太が何をしようとしているか分かった彼女が、いきなりの行為に驚いた声をあげる。

だが、お姉さんぶつた態度は変えられないらしく、細腰を限界までくねらせ、強引に肉果実で肉幹を包みながら、首を曲げて亀頭に舌を這わせてきた。

気持ちよくさせようとする思いから、汗にまみれた柔房は何度も上下に動き、唇は亀頭を追いかけるように啜えては、切っ先の割れ目に舌先を這わせてくる。

「うあっ、すごいいい……俺も、俺も気持ちよくさせないと……」

「えっ、あッ、くうんんんっ!」

自分が感じているこの気持ちよさを、彼女にも感じさせたくなくなってしまった耕太は、ペニスの刺激に歯を食いしばりながら、鋭角な股布に包まれた淫部に指を這わせていく。

指先にはプニプニとした淫唇の柔らかさが布越しに伝わり、たった数回布に浮き出していた淫裂を擦っただけで愛液が滲み出し、ピンクショーツの色を濃く変え始めた。

「ふうあんんっ、あっ……ゆ、指……んう……」

淫裂を軽く擦っただけで肢体が震え、ショーツから染み出した愛液が指にまで絡み付いてきた。

下着の色は見る見るうちに変わる範囲を広げ、熱を帯びて火照った全身から玉のような汗が浮かび上がってくる。

「こ、これじゃあ……はうっ、上手くできなく……はむっ、んっ、んっ、んチュパっ」

「沢城っ」

淫部の刺激に我慢できないらしい生徒会長が、栗色の頭を前後に振りながら、集中的に鈴口に舌を這わせてきた。

愛撫しあっている興奮。そして、強くなったペニスの悦疼きに、もう我慢ができない。

生徒会長の乱れる姿に興奮してしまった耕太は、肉幹の内部に激しい痛痒さを感じながら腰を突き上げ、指を前後に動かして淫部を擦りまくった。

もう一方の手は、自然と胸奉仕してくれている柔房を交互にさわってしまい、頂を摘ま

んでは、指先で転がしてしまおう。

「んふっ、んぷっ、んぐっ、んっんっんっ……んうううっ！」

胸の一番敏感な部分を責められた刺激に、彼女が肉幹を咥えたまま緑の瞳を見開いた。

丸い肉果実が大きく揺れ動き、唇が何度も捲れて肉幹が入りする度に、くぐもった声が甲高くなっていく。

愛液に濡れたシヨーツは透け、ヒクヒクと蠢く秘孔^{つらめ}まで浮き上がってきた。

淫部を擦る指は、興奮に拍車がかかったように動いてしまい、指を往復させる度に愛液をピシヤピシヤと飛沫をあげてしまおう。

「だ、ダメだっ、もう出る……出るっ」

「んふっ、んっ、んぷうあっ、だ、出していいよ……わたしに……ここに出していいから……んチュパっ、ふあむっ、んっ、んっ、んんっ」

沢城が必死に美双乳で肉幹を挟み、亀頭裏にまで舌を這わせてきた。

胸と舌の刺激に加え、淫部を愛撫している感覚に興奮が高まり、腰が自然に前後に動きまくってしまった。

口奉仕の強烈なくすぐったさに、ペニスは激しく脈動しながら濁液を登らせ、射精の予行練習をするように彼女の口腔に先液を吹き出し続ける。

「んふあっ、んチュっ……んっんっんっ……ふあああっ!? な、なんでこんなにピクピク

うろううううう——っ！

「くあつ、そんなに舌を動かされたら……くあつ、くうううう——っ！」

びゅるぶりゅつ、びゅぶ、びゅぶびゅぶびゅぶつ！

敏感な淫核を弾いた刺激に肢体は激しく痙攣し、ショーツ越しにもかかわらず大量の愛液を噴き出してきた。

耕太も、絶頂した彼女の舌に激しく亀頭を擦られた悦くすぐったさに限界を迎え、我慢する間もなく口の中に精液を^{ほとぼし}進らせてしまう。

生徒会長の口腔に射精する放出感に、頭の中は真っ白になったまま戻らず、何度も腰を突き上げて濁液を喉に注ぎ込んでいく。

「くあつ、まだ出……うっ」

「んう……こんら……の、飲むふいか……んくつ、んくつ……んぶつ!? んふうあつ……ごほつごほつ! んあ……っ」

初めての奉仕で興奮しすぎたために、射精の量が多すぎたらしい。

絶頂しながらも、細眉をハの字にして仕方なさげに精液を飲んでくれたが、あまりの苦しさに亀頭から口を離して咳き込み始めた。

ペニスはまだにビクビクと震え、美双乳で包まれながら何度も精液を噴き出して、切っ先を向けていた彼女の顔を白濁まみれにさせていく。

咳とともに唇から吐き出された精液は、ピンクの舌尖から垂れて乳肌に絡み付き、丸い肉果実が瞬く間に白濁液で染まってしまった。

「っ……はあはあはあ……すごく気持ちよかつ!!」

「っ……あう……はあはあはあ……口で……ごほっ……わたし……」

長い射精を終わらせ、開放感を覚えながら彼女を見た耕太は、そのまま言葉が止まってしまう。

顔と胸を精液まみれにさせた生徒会長が、すこし苦しげな表情で困っているのだ。

濡れ透けたピンクショーツはよほど恥ずかしいらしく、黒いミニスカートの裾を押さえて隠そうとしているが、ベッドの上で寝そべっているために、彼からは完全に見えてしまっている。

(ヤバイっ)

と思っても、奉仕してもらった直後で、しかも胸やショーツを見た状態では興奮を抑えることなどできない。

沢城の目の前で萎えかけたペニスはピクンと震え、再び硬くなり始めてしまう。

「も、もう……またこんなに……」

「ごめんっ」

口内射精の苦しきから、やっと息を整えて回復した生徒会長が、真っ赤な顔のまま困っ

たような、それでいてどこか嬉しそうな笑みで見つめてきた。

「きよ、今日は、これ以上は恥ずかしいから……」

もう一度奉仕をしてもらいたいという思いはあるが、さすがにこれ以上のことは望めない。

再び勃起したペニスに恥ずかしさを覚えながら、衣服を乱している彼女を見てると、

「ね、ねえ、耕太の携帯貸して」

「な、何すんだよ、いきなり」

いきなり沢城がズボンのポケットに手を突っ込み、彼の携帯を取り出した。

「恋人になった記念に、写真撮ろっ」

ベッドから起き上がり、耕太と並ぶように座った生徒会長は、長い栗色のポニーテールを揺らしながら小悪魔的な笑みで腕を伸ばし、携帯のカメラを二人に向けてくる。

「ちよっ、ちよっと待ってっつてっ!!」

さすがに慌ててしまう。

彼女は顔と胸を精液まみれにしているだけではなく、濡れたショーツを見せたままなのだ。そして耕太は、勃起したペニスを晒さらしたまま。

こんな状態をカメラで撮ったら、うかつにファイルも開けられない。

しかし、そんなことなどお構いなしに笑みを浮かべ、耕太に寄り添って頬を肩に乗せる

と、

「大丈夫、見えないように撮るから」

カシャッ。

シャッターボタンを押してしまった。

「普通の恋人同士って、よくこういうことするでしょ……クス」

撮った写真を確かめようと画面を見た沢城が、意味ありげな笑みを見せている。

「どうした？」

「……………」

何も答えてくれない。

ただ顔を真っ赤にさせながら、携帯の画面を見ているだけだ。

「これで、もう浮気なんてできなくなるよね」

「え？ なんのことだよ……………」

彼女の笑みに困惑してしまう。

しかし、そんな耕太をよそに、生徒会長はティッシュで身体の汚れを拭くと、瞬く間に

洋服を着なおして身だしなみを整えた。

「その写真……耕太がわたしの彼になった証拠だから……。それに、わたしが居ないとき

は、それで……………」

頬を膨らませた沢城が、声を詰まらせながら文句を言っている。

さすがに、この体勢は恥ずかしすぎるらしく、淫部が顔に密着したと同時に肢体が震え、大量の汗が吹き出してきた。

だが、彼にしてみれば、そんな言葉など聞いていられる状態ではない。

目の前には薄赤い淫部と、ヒクヒクと口を開閉させている秘孔が見えているのだ。

初めて女の子の大事な部分を直視している興奮に、柔らかい手に包まれたペニスはビクビクと震え、今にも射精しそうな焦燥感に襲われてしまった。

「すごいよ、こんなに見せてくれるなんて……。沢城がこんなにエッチだったなんて思わなかったよ」

「んうううっ!? そ、そんなことない……。エッチだなんて……。はあはあ……。で、でも……。早くしないと、取られちゃうから……。早く耕太にあげないと、わたしのじゃなくなっちゃうから……」

もう目の前の秘孔から目が離せない。

ヒクヒクと内部から盛り上がるように口を開閉させている腔口。よく見れば、サーモンピンクの内壁まで覗けるここに、自分のペニスを挿入する。

その興奮に、瞬きすら忘れてしまった。

(こ、ここで生徒会長と……。沢城とエッチできるっ)

初体験の期待に、頭の中は挿入することしか考えられない。

生唾を飲み込みながら生徒会長の下から這い出した彼は、そのまま彼女とともに立ち上がり、互いの顔を見詰め合ってしまう。

幼いながらも活発な雰囲気のある顔は、視線が絡まると真っ赤にさせて俯き、彼が手を引くままに机が並んだ場所へとついてきた。

「ほ、本当にいいんだよな」

「う、うん……もうっ、恥ずかしいんだから、何度も言わせないでよ……」

彼女の瞳を見ながら、そっと肢体を並んだ机の上に押し倒した耕太は、ムチムチとした太腿の間に腰を割り込ませていく。

「ふぁんっ、こ、耕太がわたしを……、すこし怖いよ……」

「だ、大丈夫、俺に任せてくれれば大丈夫だから」

初体験の怖さに細眉を下げて緑の瞳を震わせた沢城が、さつきまでの大胆さを完全に消して、甘えたような声で話しかけてくる。

処女喪失に対しての怖さ。男には絶対に分からないその怖さを拭うように、できるだけ優しい声で囁いてみるが、耕太だって初めてなのだ。

緊張を解くことも、痛くさせない方法も分かるわけがない。

それに、挿入できるといふ嬉しさに、ペニスがもう脈動して尿道まで痺れている。とて

も、乱暴にしないとは言いきれない状態だ。

「それじゃ、いくぞ」

「……………っ」

緊張を隠せない彼の言葉に、机の上で仰向けになった生徒会長が緑の瞳をそつと閉じ、長いまつげを震わせながら頷く。

グリュ……………グプツ……………ジュリュジュプ……………。

「くあああつ！ 入って……………わたしの中に……………熱いのが入って……………んううっ」

スカートを捲り、指で探り当てた秘孔に亀頭を押し付け、そのまま力を込めて小さな肉輪を押し広げた途端。彼女の肢体がわずかに硬直し、形のいい唇から呻くような声が聞こえてきた。

力を抜いて広げてくれた太腿には内腿筋が浮き上がって震え、白いニーソックスと片足に巻きついたハイレグショーツとともに、細い美脚を艶めかしく彩っている。

「さ、沢城……………」

「んあつ……………あぐっ……………うっ!! はぐうううううっ!!」

亀頭に張り付くようにくつつき、押し戻すようにペニスを締め付けてくる熱い膣内の感触に、股間に全神経が集中してしまった。

狭い膣壁を無理やり広げて亀頭を挿入していく興奮に、一歩間違えれば荒々しく腰を使



ってしまいそうになり、その衝動を抑えるだけでも精一杯になってしまふ。

愛液で潤っているにもかかわらずペニスには硬い膣壁の感触が伝わり、半ば無理やり亀頭を挿入していくにつれ、彼女の処女の証が切っ先に触れてきた。

「こ、耕太……」

「好きだから、沢城のことずっと好きだからっ」

緑の瞳を潤ませ、すがるように見つめてきた生徒会長の姿に、もう自分を抑えられない。ペニスから伝わってくる膣の感触に我慢できなくなった彼は、腰に力を込めて力強く肉幹を挿入していく。

プツツ……ジュププツ、ジュリュジュプジュプジュプツツツ！

「くひいいいッ!? あぎッ……入って……耕太のが……耕太のがわたしの……あうッ、はひッ、ひいうううううううう——ッ! ツ!」

触れれば止まる。と思っていた処女膜だったが、亀頭が触れてすこし力を込めたただけであっさりと破けてしまった。

ペニスは勢いのまま膣内を突き進み、瞬く間に根元まで秘孔に突き刺してしまふ。

暖かくて狭い膣内は、膣壁を隙間なく肉幹に張り付かせて包み、無数の膣粒を付着させた膣襞を絡み付かせてくる。

「うああっ、沢城っ! すご……くっ」

「んあうッ、あひッ……はあはあ……耕……太……」

彼のことを思ってたのか、決して「痛い」と口にしない姿に、耕太は彼女を呼びながら奥菌を嘔み締めることしかできない。

膣内に包み込まれたペニスは、焦燥的なムズ痒さが走り回り、今にも射精しそうな悦痺れが股間を直撃してきた。

「処女を失った悲しみと痛みに、沢城は唇を嘔み締めなら緑の瞳に涙を浮かべ、肢体を震わせ続けている。

「動く、動くから……くっ、うおお」

「はぐッ、まだ……あひッ、まだ……あうッ……あぐッ、くうんんッ！」

痛みを堪えている所為か、彼女が耕太の身体を下から押さえようとす。だが、ペニスから伝わってくる狭い膣の感触に、もう理性が働かない。

本能の命じるまま机に乗った彼は、本格的な正常位の体勢になって腰を動かし、小さな秘孔を捲り返し始めてしまう。

膣壁とザラザラとした膣壁に扱かれたペニスには強烈な痺れが走り、挿入したばかりだというのに、今にも射精しようと根元から引き攣っていく。

「すごいよ、沢城の中……っ、俺、もう出ちやいそうで……」

「ふうあうッ、あッ、はひッ、んくッ……はあはあ……。いいから……出しても……いつ

でも……んう、ふうああッ」

ジュプツ、ジュプツ、ジュプツ、ジュプツ。

愛液で満たされ、蠢く膣内に促がされるように腰が動き、龟头が狭い膣壁を何度も拡張して襞を捲り返してしまう。

たった数回腰を動かしただけなのに、もう淫部からは濡れた挿入音が聞こえ、呻きと混じって教室中に響き渡っていく。

（気持ちよくさせたいけどっ）

とは思うが、ペニスの痺れがもう限界に達しようとしている。

彼女を見てみれば、顔を真っ赤にさせたまま唇を噛み締め、額に玉のような汗を浮かべながら痛みに耐えていた。突き上げる度に揺れる肉果実は、小さな乳輪ごと膨らみ尖った頂を小刻みさせ、まるで吸ってほしいと願っているように彼に見せつけてくる。

「このおっぱい、また……ちやぷ、ちゆるるっ」

「ふうああッ、あふッ……ひゃんんんッ」

秘孔を思いつきり突き上げ、目の前で震えていた薄ピンクの乳芽を吸って舌を這わせた途端。生徒会長の唇から痛みの声が一瞬消えた。

肢体は痙攣したように小刻みし、机の上に寝そべった背中がピクンと跳ねて、柔らかな肉果実を彼の顔に押し付けてくる。

「ふあんん……今の……おっぱい吸われるの……すごく……」

「なら、もう一つも……ちやぷつ、ちゆるる、はむっ」

沢城の言葉が終わる前に頂から口を離し、もう一つの乳芽に吸い付くと、

「ひやうううッ!! あひッ……んふうううッ!」

今度は肢体全体をくねらせて、濡れた嬌声を奏でてきた。

今まで締め付けるだけだった膣壁は奥に向かって蠕動ぜんどうし、褻がウネウネと蠢いて肉幹に絡み付く。秘孔は甘噛みでもするようにペニスの根元を刺激し、耐えている精液を肉幹に駆け登らせようと蠢き出している。

「くああっ、もう、もう我慢が……ごめん、ごめんっ」

「ふあうッ、い、いいから……わたしも気持ちよくなつて……あふッ、だから……だから動いて……もつと激しく……ンあッ、ンうッ、はあふッ!」

ジュプッ、ジュプッ、ジュプッジュプッ!

胸の刺激で感じ始めたらしい彼女の声が上がらず、細腰は不器用ながらも動いてペニスを迎え出した。

変化した沢城の姿に、彼の腰は激しく動いて部屋に淫らな挿入音を響かせ、肉のぶつかりあう音と混ざって、初体験中の二人を興奮させる。

蠕動し始めた狭い膣壁とうねる膣襞に刺激されたペニスには、強烈な痺れが走り回り、

肉幹がビクビクと脈動しながら濁液を駆け登らせていく。

「ンふッ、ふああッ、い……………いいの……………お腹の中が……………ひゃうッ、初めてなのに……………わたし……………わたしいいッ！」

生徒会長がペニスの脈動に反応して嬌声を張り上げ、ブリッジでもするように背中を仰け反らせながら桃尻を上下させ始めた。

快楽を感じ始めた肢体に呼応するように、秘孔は貪欲に蠢いて肉幹の根元を喰い締め付け、収縮を繰り返す膣内が亀頭を最奥へと吸い込んでいく。

「くっ、すぐ……………」

ペニス全体を激しく痺れさせ、尿道の内部までくすぐられているような締め付けと膣の吸引に、耕太はもう何も考えられない。

本能の命じるまま腰を激しく動かして膣を貫き、肉幹の内部にどンドン精液を駆け登らせてしまうだけだ。

突き上げること、彼女の膣壁は捲れ返って亀頭裏にまで絡まり、強烈な射精感が切っ先から根元までを包み込んできた。

「沢城、沢城つ……………くああっ！」

「ひゃうッ、あッあッあッ……………ひゃひッ！ きちやう……………すごい……………すごいのがお腹の中から……………ふあんッ、耕太もきて……………わたしの中に……………はうッ、ンああッ!？」

びゆるるっ、びゅぶっ、びゆるびゆるびゆるびゆるびゆるるるるっ！

「ふあああッ、熱っ……熱いのが……はうッ、耕太のが中に……あッ、はひッ、くうんん
んんんんんんんんんんんん——
ッ！　　ッッ！」

意味もなく彼女の名前を連呼しながら激しく腰を動かし、痛痺れいたしびさえ感じた切っ先を思
いっつきり突き刺して子宮口に突き当てた瞬間。一気に亀頭が膨らみ、塊のような濁液が次々
に噴き出していく。

最奥への入り口を直撃してしまった精液の感触に、彼女も絶頂に駆け登ってしまったら
しく、ブリッジさせた肢体を硬直痙攣させながら嬌声を張り上げた。

天井を向いた肉果実は、大量の汗で濡れ光りながら揺れ、閉じた瞳からは涙まで流して
絶頂を繰り返している。

「くおっ、くっ……うっ」

「ふああッ、あふッ、んッ……はうう——ッ！　あうッ！　　ッ……」

硬直痙攣を繰り返す生徒会長の唇から、途切れ途切れの喘ぎが聞こえる。

初めてのエッチで彼女を絶頂させられた満足感。しかも、その相手はずっと憧れていた
女の子だ。そんな沢城の処女をもらった優越感に、一滴も精液を残したくない思いが強
くなり、耕太は何度も腰を動かして射精を繰り返してしまう。

「うあっ、うっ……っ……はあはあはあ……はあ……」

呼吸を乱し、幼さの残る顔を昂揚させた生徒会長が、もつと責めてほしいとばかりに甘えた声で答えてきた。

ペニスを握ったままの柔らかい手は、不器用ながらも上下に動いて肉幹を扱き、途切れることなく悦疼きを感じさせる。

「こっちもさわるよ」

「は、はい……」

スカートを捲りながらの言葉に、ツイントールを揺らしながらそつと太腿を開き、ピンクフリルのついた白いショーツを見せる。

手は女熱の籠る太腿の間を通り、女の子の大事な部分に指先を触れさせていく。

シユニユ……ジュリユ……ジュリユ……。

「んうううっ!? はふっ……ふあっ……はあはあ……っ……んはあ……」

サテンの布越しに淫部を擦り、淫裂に指先を潜らせて二、三度往復させただけでショーツの股布が湿り、濡れた音が聞こえ出した。

細い腰は指の動きに反応するようにピクッピクッと跳ね、ムチムチとした太腿に艶めかしい内腿筋が浮き上がる。

「もうこんなに濡れるなんて」

「だ、だって……ふあ、んう……はあはあ……」

学園で素股エッチをしたときよりも感じるのが早い。

指を動かし、布越しに淫裂を搔き広げて秘粘膜と秘孔を擦る度に、秘孔からはコブコブと愛液が溢れ、ショーツ越しに愛撫する指まで濡らしてくる。

目の前で艶めかしく濡れた声を奏でる姿に、耕太は再び胸に顔を埋めて乳芽をしゃぶり、片手で肉果実を揉みながら下着越しに淫部を擦りまくってしまう。

「ふあああつ、んあつ、はあはあ……ひゃうつ、ああ……」

敏感な部分を責められる刺激に我慢ができず、細い両腕が彼の首に絡まりながら抱き付いてきた。下着越しに淫部に触れている指先には、ヒクヒクと蠢く秘孔が吸い付き、布ごと膣内に迎えようとしている。

「んうう……が、がまんできなく……はあはあ……衣沢さんの手が……わたしのアソコをこんなにさわって……んっっ」

抱き付かれた所為で、必然的に顔が肉果実から離れてしまったが、胸を揉んで淫部を擦る刺激だけで十分らしい。

声を詰まらせた朱莉が、気持ちを伝えるように肉果実を押し付けてきた。

ショーツ越しに淫部を愛撫していた手には熱い女蜜が絡まり、見なくてもショーツが透けているのが分かる。

「朱莉、お、俺……」

「は、はい……今日は……今日は……今日は……衣沢さんので、わたしの……」

朱莉が恥ずかしげに頷きながらベッドにあがり、四つん這いになって大きな桃尻を掲げる。

―学園で一度断られた二度目の挿入。

そのときのお詫びをするように、彼女は自らスカートを捲り、濡れ透けたショーツを引き下ろして淫部を露出させた。

「……早く……わたしの中に……」

挿入を求める小さな声に、ペニスが硬く反り返ってしまい、膣内の感触を思い出して引き攣り始めてしまった。

興奮に引つ張られるように、途中まで脱いでくれていたショーツを引き脱がせた耕太は、そのまま淫部に顔を近づけて淫核を舐めしゃぶり、小さな秘孔にグプリと指を挿入してしまふ。

「はあううううっ!! あふあつ、んっ……ふうんんんっ」

大事な部分を舐められ、膣壁を指先で擦られた刺激に、朱莉が嬌声を張り上げながらラインテールを振り乱した。秘孔に挿入した指は喰い千切られるほど締め付けられ、ザラザラとした膣壁が指先に絡まっている。

「ふあつ、っ……あはっ、んう……」

膣内をまさぐられる刺激に肢体がピクピクと震え、唇が息苦しいような吐息を繰り返す始めた。

指を挿入した膣内は、奥への侵入を拒むように膣壁で締め付け、体外に排出するように奥から秘孔に向かつて蠢いてくる。

「も、もう……もう大丈夫ですから……」

「あ、ああ……」

エッチの経験はあっても、自信があるわけではない。

十分濡れているにもかかわらず、淫部への愛撫をやめない彼に話しかけた朱莉は、それほど大きな桃尻を左右に振って挿入を求め出した。

初々しくも、必死なセックスアピールに誘われるように耕太は淫部から顔を離し、亀頭を秘孔に押し当てると、小さな肉輪をゆっくりと押し広げていく。

「はうっ!? ああ……入って……わたしの中に……、あぐっ、こんなに熱いなんて……はあはあ……」

「うあつ、か、硬いつ」

まるで処女のような硬さに驚きながらも、一回り大きい亀頭をグブリと秘孔に挿入した直後。四つん這いになっていた彼女の上半身がベッドに突っ伏し、痛みに耐えるようにシートをギュッと握り出した。

形のいい唇は詰まった呼吸を何度も繰り返し、桃尻が小刻みに震え続ける。

「朱莉の中、また奥まで……」

「ふああ……ひぐっ……んああ……ひいうう……」

ジュリュブブ……ギユブ……ジュリュジュブジュリュ……。

膣壁を拡張させて亀頭を奥へと押し込んでいくが、滑らかさを感じない膣壁はペニスを拒むように締め付け、なんとか排出させようと秘孔へと向かって蠢いてくる。

しかし、興奮した彼には、そんなことなど関係ない。

再び沢城とエッチでできる嬉しさに、亀頭で膣壁を押し広げながら、膣内にペニスの形を教えるように挿入していく。

「あうっ……うっ……はひっ、はああ……い、痛い……」

二度目とはいえ、まだ挿入に違和感があるらしく、生徒会長が苦しげな声で呻きながら前へと動き出した。

逃げるような行動だが、彼にとってはそんな姿も興奮を高める姿にしか映らない。

大きな桃尻を揉みながら追うように腰を動かし、ペニスのすべてを挿入しようと、腰を大きく動かして亀頭をさらに突き込んだ直後。

ブツツ……ジュブジュリュジュブジュブツツツツ！

「くはああッ!? 入って……わたしの中……衣沢さんの熱いのが……痛いッ、痛……はひ

ッ、ひぐうううううううう—— ツツツ！

亀頭が何か薄い膜を引き裂き、朱莉の唇から痛みを告げる声が奏でられた。

二度目の挿入だというのに、肢体はプルプルと震えて大量の汗が吹き出し、緑の瞳からは涙まで溢れて赤い頬に伝っていく。

「き、気持ちよくて、我慢できないよ……」

ジュプツ、ジュリユツ、ジュプツ、ジュプツ。

「はぐツ、ひあツ、激しい……あうツ、お願い……ゆつくり……ッ、ひくツ！」

挿入したときの異質な感触と彼女の痛がり方に、耕太は腰を動かしたい衝動を抑えながら幼い顔を覗き込む。

「だ、大丈夫か？ この前より、きつい気がするけど」

「んうツ……はひツ、はあはあはあ……だ、大丈夫……ま、まだ慣れて……慣れてないだけ……だから……」

真つ赤な顔で泣いている朱莉が、心配ないとばかりにお尻を動かして答えてきた。

彼女の姿、そして痛みを我慢している声に疑問が残るが、また挿入できた興奮と嬉しさに、そこまで頭が回らない。

膣内の温かさと締め付けに、腰は自然と前後に動き出してしまい、硬い秘孔を貫き始めてしまう。

「んううッ……はうッ、んッ……ふうッ……ッ……」

ジュブジュブと淫らな挿入音を鳴らして肉幹をピストンさせても、膣内は排出させるようにしか動いてこない。

だが、確実に前るときとは違う感触がペニスから伝わる。

初めてのときは狭い膣壁に締め付けられ、膣壁が絡まりながら強烈に吸われる感触があったのだが、今回はその吸引が弱い。しかしその代わりに、膣壁が増えて肉幹に絡まり、表面に付着している膣粒の数も多くなっているのだ。

新しい膣内の感触にペニスには激しい痺れが走り、耕太は夢中になって秘孔を貫いてしまふ。

「ふあううッ、あひッ、あッ……ひゃふッ、い、痛いですッ、痛くて……あふッ、んうッ、ひゃんんんんッ！」

再び痛みを告げる言葉が聞こえる。だが、昨日の素股エッチのときに気づいたことだが、朱莉はもともとM気質があるらしく、乱暴にすればするほど声に濡れた色が混ざっていく。腰を叩きつけ、膣の最奥を突くようにペニスをピストンさせる度に、膣内は排出させようとする動きから迎え入れるような蠢きに変わり、細腰が不器用ながらもくねってくる。

多くなつた膣壁は別の生き物のように肉幹や龟头裏にまで絡まり、無数の膣粒で擦って理性を失わせるような焦燥感を彼に与えてきた。

濡れた挿入音はジュプツジュプツと滑らかな淫水音に変わり、膣壁が奥へと向かってウネリながらペニスを引きずり込んでいく。

「うあ、またこんなに動いて……朱莉、いいよ、最高だよっ」

「ほ、本当ですか……んあ、嬉しいです……はあはあ……わたしも気持ちよくて、だから……ッ、だからもつと動いてください……わたしを耕太さんのものにしてッ！」

もつと激しいエッチを求めてきた彼女の姿に、彼は激しく肢体を突き上げたくなくなってしまう。

「朱莉の身体、奥まで全部……っ」

「は、はい……ッ、ああッ!? ひゃんッ！」

彼女の身体を壊れるほど突き上げたい欲求に、秘孔を貫いたままベッドの上で立ち上がった耕太は、一度ペニスを引き抜いて沢城を振り向かせる。

「ふあ……はあはあ……どうしてやめるの……きやうんッ!!」

ペニスを引き抜かれたことを不思議がる朱莉の顔を見ながら、ムチムチとした太腿を持ち上げた耕太は、再び秘孔に切っ先を挿入して突き上げた。

一度挿入していた小さな肉輪は、亀頭に張り付くように広がって簡単に受け入れ、もう抜かせないとばかりに締め付けてくる。

しかし、立ったままの対面エッチでは、根元まで挿入することができない。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※二次元ドリーム文庫は、全巻の方向性でございませぬ。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



Valkyrie
http://www.comic- Valkyrie.com/

cranberry
http://www.cran-berry.com/

mille-feuille
http://www.mille-feuille.jp/

モバイル二次元ドリーム
http://www.2d-dream.jp/

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!